

## 児童養護施設での教育支援プロジェクト

### 【メンバー】

【学生】 鎌田 凪/黒島 歩/後藤 恵理/濱田 あかり/菅野 早彩/寺島 歩南/立石 杏  
 【担当教員】 田中 邦明

### 【背景】

今日の児童養護施設では、単に親に代わって養育してだけでなく、さまざまな要因によって傷ついた子どもたちをどう癒して支援していくかが大きな課題となっている。この課題を解決するためには、地域の協力が不可欠である。

### 【目的】

先に述べた児童養護施設の背景をふまえて、わたしたちは地域の一員として、児童養護施設の支援に貢献したいと考えた。

### 【概要】

施設見学に始まり、9回にわたる子どもたちとの遊びを通じた交流を行った。

### 【プロセスと成果】

前期の活動は全4回あり、そのうちの第1回と第2回は、男女に分かれて活動を行った。男子グループでは、第1回は「子どもの名前を覚えよう」を目標に、自己紹介・ミニゲームを行った。学生は目標にあったように、男子全員の名前を覚えることができた。第2回は「学生の名前を覚えてもらおう」を目標にカタキ（ドッジボールに似たボール遊び）・ドッジボールを行った。子どもたちがとても楽しそうに活動に参加している様子が見られ、子どもたち自身が楽しめる内容であったと考えられる。女子グループでは、第1回は、「子どもたちの名前を覚えよう」を目標にアイスブレイク（場の雰囲気を和ませる手法）を行った。ゲーム感覚で行うことで緊張感を和らげることができた。また、子どもたちの興味・関心について知ることができた。第2回は、「学生の名前を覚えてもらおう」を目標に、トランプゲームを行った。話す機会を増やしたことで、短い時間ではあったが、お互いに名前を呼び合いながら学校のことなどについて話をすることができた。第3回と第4回は男女合同で活動を行った。第3回は「子ども一人一人とコミュニケーションをとる機会を増やし、楽しさを共有しよう」を目標にバドミントンを行った。子どもと話す機会が増え、子どもが学生に対して積極的に発言をする姿が見られたことから、学生と子どもの信頼関係が築けてきたのではないかと考えられる。第4回は「チームで協力して活動する中で一人一人の個性をさらに知ろう」を目標に、風船遊び・ケイドロ（鬼ごっこ的一种）を行った。これまでに見られなかった子どもの個性や子どもたち同士の関係性が新たに見られた。

前期の活動を踏まえて、後期の活動では3つの工夫をした。1つ目は、前期には児童から鬼ごっこがしたいという声が常にあったため、毎回活動の最後に全員が楽しめる「Enjoy Time」として5分間の鬼ごっこ時間を設けた。2つ目は、前期の活動で、ゲームのルールを守ることができない児童がいたという反省から、視覚的な注意書きを作成、提示し、ルールを守らせる工夫をした。3つ目は、お互いの呼び方で敬意を表すため、学生の名札に敬称をつけ、「○○さん」と呼んでもらうようにした。

後期は男女合同で全5回の活動を行った。第1回は、「ルールを守りながら一人一人が積極的に参加し、創意工夫して楽しもう」を目標に、おせんべいめくり・はしごオニを行った。チームで作戦を立てるなど、協力する様子や楽しんでいる姿が見られた。第2回は「積極的に活動に参加し、協力して一つのことに取り組もう」を目標に、からだ遊び・新聞紙を使った遊び・しっぽ取りを行った。活動全体を通して新聞紙を使うという統一性のある内容を企画し、子どもたちも試行錯誤しながら、積極的に活動に取り組んでいる姿が見られた。第3回は「ルールを守り、怪我することなく全員で楽しもう」を目標に、ボール運びゲーム・ドッチビー（フリスビーとドッジボールを合わせたような遊び）・島オニを行った。ルールを視覚的に提示することで、子どもたちにルールを守るという共通意識をもたせることができた。また、全員が怪我することなく、楽しんでいる様子が見られた。第4回は「自由に楽しく体を動かそう」を目標に、バドミントン・卓球・増やしオニを行った。子どもたちの主体的な活動を尊重した内容を企画し、全員が楽しめるものになった。また、男女ができることをお互いに教え合っている姿が見られた。第5回は「一緒に楽しく遊ぼう」を目標に、縁日（ストラックアウト・スライムづくり・写真たてづくり・羽根つき）を行った。学年男女それぞれに合わせた活動を用意し、一人一人が好きなことに取り組み、満足できる内容を展開することができた。

**【総括と反省・今後の課題】**

前期の活動では、児童の名前や趣味などの個性や人間関係などを知ることができ、親しくなれた。後半の2回は男女合同での活動だったが、男女別よりも楽しめているように思われた。学生も児童と同様に楽しみながら活動することができた。

課題としては、「児童の個性を把握せずに、積極的に関わりすぎた」「ありきたりな遊びになってしまった」という学生からの反省が出た。そのため、後期の活動では、自分の立場をしっかりと理解し、常に言葉遣いや態度に気を付けて、子どもたちと関わり、子どもの個性を生かした多彩な遊びを展開していく必要があると考えた。

後期の活動として、男女一緒に活動することで、遊びの種類に多様性が生まれ、児童が主体的に参加できるような遊びを展開できた。遊びの中で男女で教え合ったり、卓球やゲームを楽しむ姿が見られ、児童同士が前期より深く関わり合っていた。学生と児童とのコミュニケーションも活発になり、学生全員が名前で呼ばれるなどお互いの関係を深めることができた。後期は、施設職員の積極的な協力により、児童との活動時間を2倍に増やすことができた。

課題としては、擦り傷などの怪我防止の指導が必要だと思われる。また活動の中で、話を聞くときは静かに聞く、楽しむときは思いっきり楽しむなどのメリハリをつけるために、適切な声掛けをする必要があると考えた。

私たちは今回、休日を利用したスペシャルイベントを企画していたが、施設との日程が合わず実現することができなかった。そのため、施設との連絡を早いうちから取り合い、来年度の地域プロジェクトでは余暇を利用した活動を展開していきたいと思う。

**【地域からの評価】**

今回の児童養護施設での教育支援プロジェクトについて、児童と指導員の方々から以下のような評価をいただいた。

- ・児童  
児童が一番楽しかったと答えた遊びは、縁日であった。次いでバドミントン・卓球やおせんべいめくりが挙げられた。児童から「参加していくうちに楽しくなった」、「またきてほしい」、「みんなでやったから全部楽しかった」、「もう少し落ち着いた遊びもやってみたい」などの声があった。
- ・指導員の方々  
指導員から見た児童の様子について、「毎回活動内容に変化があったため、学生との交流を楽しみにしていました。終了後には良い表情で遊びの内容を話してくれていました。」、「縁日では、活動終了後もスライムであそんでいたり、写真立てを飾ったりしていました」という声をいただいた。また今後、期待する活動や改善点として、活動にメリハリをつけることや危険を予測し、怪我を予防することなどのアドバイスをいただいた。全体を通しての感想として、「毎回楽しみながら参加していたのでこれからも続けてほしい」、「活動内容が毎回変化していたのもよかった」、「明日学生さんたち来るよと児童に話すと、来るの!?何するかなど楽しみにしている様子が見られた」という声をいただいた。

**【その他】**

**■年間スケジュール**

前期	5月 9日	第 1 回 「男子:自己紹介・ミニゲーム 女子:アイスブレイク」
	5月23日	第 2 回 「男子:カタキ・ドッチボール 女子:トランプゲーム」
	6月13日	第 3 回「バドミントン」
	6月27日	第 4 回「風船遊び・ケイドロ」
後期	11月14日	第 1 回「おせんべいめくり・はしごオニ」
	11月28日	第 2 回 「からだ遊び・新聞紙で遊ぼう・しっぽ取り」
	12月 5日	第 3 回 「ボール運びゲーム・ドッチビー・島オニ」
	12月19日	第 4 回 「バドミントン・卓球・増やしオニ」
	1月23日	第 5 回「縁日」